

そよかぜ診療所での研修を終えて

神戸大学医学部附属病院 初期研修医

角谷 美咲

初めて足を踏み入れた朝来市で、暖冬により室内外問わず大量発生したカメムシとの格闘とともに、そよかぜ・はるかぜ診療所での研修が始まりました。怒涛のワクチン接種、苦手な採血に心エコー、初めての頸部エコーに訪問診療。初日は緊張と不安でいっぱいでしたが、スタッフの皆さんが本当に温かく迎え入れてくださったおかげで、職場にはすぐに慣れることが出来ました。

初日にまず驚いたことは、スタッフと患者さんの距離感でした。そよかぜでの診療は、何気ない世間話から始まります。「急に寒くなったねえ」「最近散歩してる？」「お母さんは元気？」訪問診療前の静子先生からの申し送りも同様です。患者さんの病態や内服薬の情報に加え、元々こんな仕事をしていて、趣味は〇〇で、近所の□□さんと幼馴染でといった、まるで友達のような情報を沢山教えていただきました。医療者と患者である前に、同じ地域に住む住民同士として接する姿に、そよかぜの皆さんが普段からどれだけ親密に、そして大切に、患者さんとの関係性を築いているのかが窺えました。訪問診療では、それが顕著に現れます。最初は、病棟とは違って毎日顔を合わせるのではない患者さんのことを、どうやって診るんだろうと思っていました。でも実際診療に行くと、10分ほどの診察の中でも十分に患者さんを知ることが出来ることを学びました。大事なのは相手を知ろうと思う姿勢です。ご自宅での診察なので普段の生活環境やご家族との関係性が感じ取れ、病棟よりもリラックスされている分、患者さん側から沢山お話して下さることが多かったように思います。また、「先生もうだめかもしれんわ。」と訴える患者さんに対し、静子先生が「もう歳やでなあ。その時はその時やで。」と返す場面を何度か見かけました。大学病院の外来で同じ言葉を聞くと、また違った印象を受けたかもしれません。ただ、定期的に顔を合わせ、言葉を交わし、身体に触れ、ゆるぎない信頼関係を築いているからこそ、患者さんもお家族も安心して任せて下さる。患者さんの性格を知っているからこそ、その人に合った声掛けが出来る。価値観や死生観を共有しているからこそ「その時はその時」という言葉が同じ方向を向いて受け取ってもらえる。地域診療は医療者と患者の圧倒的な信頼関係の上に成り立っていることを痛感しました。そして、今まで見てきた治す医療だけではなく、人の最期には必ず必要となる見守る医療・支える医療を経験できたことは、今後の私の医師人生にとって本当に貴重な糧になると思います。

また、チーム医療の重要性を強く感じる1カ月でもありました。訪問看護や訪問リハビリに同行させていただき、在宅療養相談室の方々に介護保険や医療保険の仕組みを教わり、総務部の方々が仕事が円滑に回るよう細やかなサポートをしてくださり、普段あまり見る機会のない他職種の方々の仕事を、常に側で感じながら働かせていただきました。

そして、1人の患者さんの生活と健康を維持するために、本当に沢山の人が関わっていることを知りました。今まで言葉でしか分かっていなかったチーム医療を実際に体感し、普段から自分がチームの一員である意識を持って働くことが重要なんだと再認識しました。

私は将来、総合診療医として地域を支える在宅医療に携わりたいと思っています。このそよかぜ・はるかぜ診療所で過ごした時間や経験は間違いなく私の財産であり、これからの医師人生を支え、背中を押してくれるものになると思います。1か月間 優しく温かく迎え入れてくださり、ご指導いただいたそよかぜ・はるかぜ診療所の皆様、関わらせていただき温かいお言葉をいただいた患者様・ご家族様、本当にありがとうございました。皆様のご健康とご多幸を心からお祈りしております。そして、この研修で学び得たものを胸に精進し、一人前になり、いつかまた皆様にお会いできる日を楽しみにしております。